



f-haiku

2019

Ferris University



f-haiku 2019

Ferris University

- そこにある／井上雪子 …… 2
口笛／伊東伸孝 …… 3
時雨てよ／川井京子 …… 4
冬桜／清岡ひさ子 …… 5
糸瓜の花／小宮山真知子 …… 6
疎水べり／丸矢一夫 …… 7
凸面鏡／森田一弘 …… 8
山茶花／中楯真美 …… 9
虫喰／中村義和 …… 10
春風／西村 翠 …… 11
生きる／大越千代子 …… 12
新米／佐々木裕雄 …… 13
一日路／谷嶋睦夫 …… 14
春の空気／吉野裕之 …… 15
後記／吉野裕之 …… 16

そこにゐる

井上雪子

本牧に炎塔美しき走り梅雨

柚子搾る築九十年の台所

暮れる日の葉のなかに咲くヤマボウシ

釜石の夜の僕には席がない

Dark - Sky よだかの抱卵記録読む

桜紅葉の光んとこで眠つてた

積乱雲こどもひとりも降りて来ず

青々と真直ぐに松の内にゐる

夕空の深さ飲みほす外野席

雲のごと抱へる痛恨二月が来

照柿や誰にも会はない行き止まり

空を向く優しい角度春の雪

口笛

伊東伸孝

草臥れてなほ通ふひと夏よもぎ

木漏れ日の林のホダをかぞえけり

合歓の花手術のあとの傷よつつ

山茶花やのびのびと弾く姉弟

梅雨のはれ日の丸つけたプロペラ機

口笛と波の音オーティス・レディング忌

青大将生かしておけといふ男

蠟梅や決まらないまま走り出す

新涼や優しき人の逝きにけり

背中から腰へのライン冬ざるゝ

秋曇りはなし聞かためチャイナから

風花や心電図にある軸偏位

時雨てよ
川井京子

薄暮のなか指にとまりし赤とんぼ
秋霖にぬれて急ぐや朗読会
面会は二時かららしく懐手
終章なきオーケストラや暮の秋
雪吊をいそがしさうに十月尽
時雨てよ時雨てよけふどこへもゆかず

埋蔵品掘る男等や冬に入る
酒のんで己知るひと根深汁
柚子風呂にやや流れありかたまりぬ
濃あぢさゐ貸家となりし妣のいゑ
饅頭の湯気のいきほひ梅見茶屋
しらぬ街のギャラリーさがす冬隣

冬桜
清岡ひさ子

はさまれし栞のリボン桜まじ
春めきて連なる貨車の長きかな
どっどどど白波崩れ春の宵
引越しの庭のそらまめまだ若し
商店街つきあたりには夏の雲
夕明かり山ももの実を踏んでみる

鯛雲数え始める昼寝どき
店先は菊の香のにぎわしさ
草むらのサッカーボール冬隣
空に追う小^ちさき指先小六月
とおまわり道いっぱいの冬の影
柏手の小さき響き冬桜

糸瓜の花
小宮山眞知子

柴犬に触れる子退く子風薫る
初夏やウインドウ飾る浅黄色
傾きし陽は棚にあり花糸瓜
真清水やまずひとくちと空ボトル
幼子に団扇は重し酢飯かな
汗ばむや異国語混じる問屋街

在祭交通止めの帰路遠し
もぎたての無花果ざるに乳雫
泪目や歩は小走りに風冴ゆる
左手が悴むベッドの読書灯
新聞の折り込み重く初明り
背すじ伸ぶ四温日和は道にあり

疎水べり
丸矢一夫

春立ちて老舗の菓子屋人の列
チューリップ静か静かに顔を出す
花めぐり女人高野は菩薩かな
春めいて人出に驚く疎水べり
張替し障子の前に紅の梅
漆喰に黒かかげ躍る幟かな

北辺にはな咲きたるを聞く五月
ストレッチ先生若く五月晴れ
短夜や九段九段の棋譜を追ふ
年の内スーツケースを新調す
三十年護りとした木冬に切る
日脚伸び掛け声変わるグラウンド

凸面鏡
森田一弘

春疾風盜賊除けのお札見ぬ
ティンパニー拍を数へて待つ夏夜
ぎよろ眼剥く凸面鏡に鬼やんま
へばりつく天道虫や高速道
闊歩する破れジーンズ夏の雲
饒舌はさみしさ故か蟬時雨

友思ふときつくつく法師鳴きやまず
返り花みな若かりし日のあるを
ひたすらにただひたすらに冬マラソン
完走の証のメダル冬薔薇
黒塗りの深皿に盛る冬の膳
森閑と競馬場廃墟冬夕焼

山茶花
中楯真美

お雑煮のお餅小さく義母の椀
マフラーをぐるぐるに巻き駅に立つ
梅の枝を飾りて咲くを待つばかり
春風とベイビーハイハイ笑み運ぶ
帰り道ゆりの花買う聖母月
梅雨入りて溜息ばかり会議室

拭いても拭いても汗噴き出しぬ
金木犀ひと月おそく花をつけ
ぼんやりと鏡の中の石榴みる
山茶花の花嫁リンと立っている
クリスマス実験室にも星おいて
朝市の苺見くらべ十二月

虫喰

中村義和

卒業を立派に終へてもんじゃ焼き
揚げ雲雀ならばその空呉れてやる
葎草の家の内には花一輪
軽トラの田の土落とす半夏生
ひと皿の中に小分けのサクランボ
出来ぬ事あると口にし梅雨に入る

青梅の我の手は四ッ納めたり
植木鉢置くところ変へて秋の空
稲妻や雲隆々と闇に在り
歳の市影に追はれて店じまい
耐ハイを買ひに男の昼二日
虫喰ひも昭和遠きと飾り白

春風

西村 翠

夕闇のどんぐり貯める心字池
マンションの礎石にとどく冬日かな
ポインセチアの緋色ひろがる宵の窓
小春日や方丈におく車椅子
手袋のきき手をさがし朝の空
みそ汁の煮干しのめだま寒明ける

売り物件の看板の錆春の夢
谷戸奥の寺への絵地図梅白し
なかぞらにひろがるうめのしろさかな
香煙の残る参道春浅し
春風に読経乗りくる幼稚園
たてふだに「こどものたんぼ」春の風

生きる

大越千代子

生水をイツキにのみほす春動く
家主なきいっぽんの裸木なお寒し
地響すりレーレースの秋当来
土手に生きすすきの群れは道しるべ
休日やまたまた台風のこす跡
一枚の転がりおちる枯葉かな
畑に立つ捕虫網ふる婆の秋
天気よし墓もにぎわうお正月
しずかさや実包ひびく山の秋
夕日さす枯葉あつまる庭の奥
じつと見る残る一枚のカレンダー
どんど焼豚汁まつひと人や人

新米

佐々木裕雄

青空によき一色の黄蝶かな
遠き日や枕飛び交ふ林間学校
春の土踏めば足形残りけり
朝顔の葉なえて種に移りけり
春水の光る小川や子等の声
新米を妻と食べたき塩むすび
夏近し森の木漏れ日明るくて
鳴く声に了を潜むる残る虫
目高生れ頬杖をしてみてゐたる
ひとりして判じ絵を解く師走かな
やご静か水槽の稚魚消えてゐる
正月の銭湯空の桶の山

一日路
谷嶋睦夫

トンネルを皆くぐり行く春探し
渦巻の水流に舞ふ春着かな
湯の花を手で掬い取る薄暑かな
桑の実や世の人々は走りけり
低く来て高く飛び去るアゲハかな
栗ご飯今日はいつ頃帰るかな

アドレス帳引っ張り出して冬に入る
沸き立つや湯気に陽のさす冬の朝
住所録上書保存寒四郎
丸印多き年かな古暦
ナビ上の目的地にて初写真
リモコンを握ったままの除夜の鐘

春の空気
吉野裕之

掴み取るべく大寒を待つてゐる
雪が来る予報といつて眠りけり
冬日和貸広告は遠くにある
大寒の被さつてくるビルの影
雑巾は冬のひかりを拭くものぞ
マスクして美しきこと語りけり

たんぽぽのぽのごと笑ひ立ち上がる
靴下に春の空気を入れにけり
傾いてつくしと思ふさう思ふ
薬や事務所移転の手続きを
暖かな箱を抱へて乗つてくる
ガチフロのお世話になつて春の薔薇

後記

吉野裕之
Hiroyuki YOSHINO

『haiku 2019』は、フェリス女学院大学オープンカレッジの講座「俳句の創作―日本語のすばらしさを学ぶ」（春学期／四月～七月、秋学期／十月～一月）の二〇一九年度の受講生による作品集です。

この講座がスタートしたのは二〇〇四年四月。あつという間に十六年が経ちました。この間、やり方を変えたり、お休みしたりしましたが、今回で二十二冊目の作品集です。

受講生の皆さんはとても熱心で、各学期八回の授業に加え、学期と学期の間のお休みの期間には自主的な集まりを持ち、しっかりと俳句の勉強をなさっています。やはり、一緒に学ぶ仲間がいることは、すばらしいことだと思えます。

自由参加の一冊に、十三名が集まりました。とてもよいものになりました。多くの方に読んでいただきたいと思えます。

なお、作品は姓のアルファベット順に掲載しています。



f-haiku 2019

2020年3月31日発行

フェリス女学院大学 生涯学習課

〒245-8650 横浜市泉区緑園 4-5-3

tel = 045-812-8390 url = <http://open.ferris.ac.jp/>

頒価 = 300円 (税込)

制作 : アトリエ云